



## 震災後の福島から感じること

福島市在住 F.Y.

震災から6年が経ちます。私の一番下の子供は震災の年に生まれました。娘の誕生日がくるたびに、「あ〜、あれから6年か・・・。」と震災のことを思い出します。震災直後に、妊娠が分かり、情報が錯綜する中、「避難した方がいい、放射線は身体によくない・・・。」そんな言葉に後押しされながら、私たちは実家がある秋田に避難することになりました。秋田は放射線や震災とは全く無縁の世界。多くの被災者たちを本当に温かく迎え入れて下さいました。放射線というストレスから離れることができた安心した生活。一方で、仕事がある主人やたくさんの友達を福島に残してきた罪悪感。福島ではみんなが頑張っているのに、私たちだけが不自由のない生活をしている。秋田の生活ではたくさんの支援をいただきながら、真の幸せを感じることはありませんでした。そして、どこに行っても、福島から来たことで、大事にさせていただき、優しい言葉をかけていただきながらも、私たちの居場所を見つけることはできませんでした。

無事に娘を出産し、福島に戻ってくることが出来たときの喜びは、放射線の影響がどうあれ、家族と一緒に暮らせることが一番と感じた瞬間でした。子供たちも秋田に一時滞在していたときは、福島から来たことで、よく声を掛けられ、注目を浴び、何だかいつも困った顔をしていました。震災後の福島では、確かに、外遊びが制限されたり、マスクをつけさせられたり、それまでとは違うことがたくさんありました。けれども、こども達にとっての大きなストレスは生活の不自由さよりも、周りの大人たちの放射線に対する敏感な反応の方が大きかったように思えます。



ふっこうの架け橋を通して、神戸に招待していただいた子供たち。神戸の方々にとって、福島の子供たちはどのように見えたのでしょうか？決してストレスを抱えこんだ、悲観的な子供たちではなかったと思います。大人の私から見ると、手を差し伸べて下さった温かな支援を心より感謝し、楽しんでいたように見えました。与えて下さるものを素直に受け取り、それを心の糧として、生きていく。その子供たちの姿勢は私たち大人が学ばなければいけないことだと感じました。子供たちは与えられた環境の中で、いつも喜びを探しています。それは神様が望んでいることです。何て子供たちは素晴らしいのでしょうか。



今の福島の子供たちは、毎日の生活に一生懸命です。震災のこと、放射線のことを思い出すことはほとんどなくなりました。きっと子供たちは前だけを向いて生きているのでしょうか。福島市の学校にも震災後はたくさんの避難してきた子供たちが転校してきました。あれからもうすぐ7年。それぞれの子供たちは自分たちの居場所を見つけることができたのでしょうか。子供たち、そして大人がどんな環境にあっても、それを受け入れ、希望を持って生きることを願うばかりです。どうか神様のお導きがありますように！

謝し、楽しんでいたように見えました。与えて下さるものを素直に受け取り、それを心の糧として、生きていく。その子供たちの姿勢は私たち大人が学ばなければいけないことだと感じました。子供たちは与えられた環境の中で、いつも喜びを探しています。それは神様が望んでいることです。何て子供たちは素晴らしいのでしょうか。



\*今回は2017年度“ふっこう”プログラムに参加されたお母さんからの原稿を掲載致しました。また、2018年度“ふっこう”の実行委員会も始動し、神戸地区の合同キャンプを予定しています。

